

## 立春祭 理事長お話

「立春祭」、おめでとうございます。

今年の冬は、記録的な大雪となっている所もありますが、本日は全国各地から、ようこそ聖地にご参拝くださいました。

瑞雲郷では、梅のお花が咲き始め、かすかな春の予感を漂わせています。

また、「聖地総合建設」の一環として、MOA美術館では、昭和57年の開館以来初めてとなる大改修工事を経て、明日リニューアルオープンを迎えますが、本日は信徒の皆さまに内覧会が開催されています。

明主様がこよなく愛された、国宝「紅白梅図屏風」や「色絵藤花文茶壺」をはじめ数々の名品を、新しく生まれた美術館において、明主様とご一緒にぜひお楽しみいただきたいと存じます。

さて、本日私共は、明主様に結ばれたものとして、意義ある「立春」を心からお祝いさせていただきました。

私は、本日のみ祭りにおいて、私共一人一人の中心（分<sup>わけ</sup>霊<sup>みたま</sup>）に、大光明の輝きをもって生きておられる神様に心に向けさせていただける喜びを、あらためて深く胸に刻ませていただきました。

そして、神様がご自身の子供たるメシアをお生みになるという「明主様の全く新しい救いの福音」を、本年はより一層お受けし、お伝えさせていただきたいのですという思いを、明主様と共にあるメシアの御名<sup>みな</sup>にあって、神様にご奉告させていただきました。

先ほどは、全国の信徒の皆さまを代表して、〇〇さんが感謝奉告をしてくださいました。ありがとうございました。

〇〇さんは、「大光明」のご神体を拝させていただいて、また、日常生活のさまざまな出来事を通して、ご自身の心に浮かぶありのままの思いを正直に神様にご奉告し、最後に「祈りの言葉」をもって全てを神様に委ねさせていただく営みにお使いいただいているお話をしてくださいました。

私は、本日の感謝奉告を通して、教主様が昨年私共のために作成してくださった①之光教団の新しい「ご祈願書」のことが心に浮かんでまいりました。

私は、この「ご祈願書」を通して、自らの心に浮かぶさまざまな思い、喜怒哀楽などを自分のものとしてきた姿に、そして、自分の物差しによる善し悪しの判断をもって一喜一憂してきた姿に、また一つ気付かせていただきました。

同時に、私は、心に浮かぶさまざまな思いの全てに、神様の愛と赦しと救いのみ心が現れているのだと信じることができるように導かれていることに、気付かせていただきました。

こうして、私は今、日常生活のさまざまな事柄に際して、当然一喜一憂はする訳ですが、それでも、どんな時も、心のどこかに希望の光が輝いていることを忘れずに進ませていただけるように努めています。

そして、このたびの「大光明」のご神体奉斎は、この希望の光の源が、自らの中心に燦然と輝く大光明の光と共に生きておられる神様のご存在であることを、私に強く意識させてくださるものとなっています。

私は、本日意義ある「立春」の日に、明主様がまた一つ大切なことに気付かせてくださったのではないかと、感謝をもって神様にご奉告させていただきました。

さて、新たな年を迎えて早1カ月が過ぎました。

この間、私は、「真善美」新年号の巻頭に掲載されている「メシヤ降誕仮祝典」における明主様の御姿を日々仰がせていただき、また、新年号の冒頭のみ教え（「宗教文明時代」）と、教主様の「新年ご挨拶」を毎日欠かさず拝読させていただいております。

明主様は、このみ教えの冒頭、

私はメシヤ教を創立し、爾来<sup>じらいしし</sup>孜々として宗教活動に邁進しつつあるのは、いうまでもなく人類救済の大目的達成のためであるが、それだけならば在来の宗教も唱えたところで、いまさら事新しくいう必要はないが、本当をいえば一般人の頭脳に沁み込んでいる既成宗教観を抜いてしまわなければ、本教の実体はどうてい掴み得ないのである。というのは現在までの宗教も科学も、あらゆる文化の水準を遙かに超越しているところの超宗教であるからで、適切な名称さえ見つけ難いのである。

と、このようにみ教えくださっています。

『本当をいえば一般人の頭脳に沁み込んでいる既成宗教観を抜いてしまわなければ、本教の実体はどうてい掴み得ないのである』と仰せになっている明主様が、今私共に何を求めてきておられるのか、私共に今何に気付きなさいとおっしゃっているのか、私はこの1カ月、このことを少しでも受け止めさせていただきたいと願ってまいりました。

そして、明主様が、教主様の「新年ご挨拶」の中に、「本教の実体」について大切なことを明確に指し示してくださっているのではないかと、私はどうしてもこのように思えてなりませんでした。

明主様は、

『大救主の御名は最後の世を救ふ尊き御名なり心せよかし』

というお歌を私共にお与えくださいました。

明主様がこのお歌を通して私共に「心せよかし」とおっしゃった「メシアの御名」の受け止めについて、教主様は、「新年ご挨拶」において、明主様のみ教えやお歌、またご事蹟などからお示しくくださり、そして、次のようにご明示くださっています。

明主様は、昭和10（1935）年のご立教後、機関紙としての新聞「東方の光」と共に、雑誌「光明世界」を発刊されましたが、その創刊号の巻頭言には、次のようなお言葉が記されております。

神は光にして光のあるところ  
平和と幸福と歓喜あり  
無明暗黒には  
鬭争と欠乏と病あり  
光と栄えを欲する者は来れ  
来りて——  
観世音菩薩の御名を  
奉称せよ  
さらば救はれん

このように、明主様は、「観世音菩薩の御名を奉称せよ さらば救はれん」というお言葉をもって、この巻頭言を結んでおられます。

しかしながら、私どもは今、メシアがこの観世音菩薩の本体であり実体であることをお示しいただいているのですから、この巻頭言のお言葉は、主神が私どもに対し、

メシアの御名を奉称せよ さらば救はれん

と命じておられるお言葉として受けとめさせていただく必要があるのではないのでしょうか。

そして、主神の子として新しく生まれるために、明主様と共にあるメシアの御名みなにあつて、天国に立ち返らせていただかなければならないのではないのでしょうか。

教主様は、このように私共に問い掛けてくださっています。

私は、「新年ご挨拶」を繰り返し拝読させていただく中、「大光明」「メシアの御名」、そして「祈りの言葉」、この三つの言葉を通して、明主様が①之光教団の私共に今とても大切なことを告げ知らせてくださり、迫ってきてくださっているように受け止めさせていただきました。

私は、明主様の『神は光にして……』というご立教に際してのお言葉にあらためて触れさせていただき、「大光明」と「メシアの御名」、そして、「祈りの言葉」が、初めから私共の中心に刻まれていたのではないかと気付かせていただきました。

ですから、私は、神様の子供として『新しく生まれる』ために、神様がご自身の子供たるメシアをお生みになるという“明主様の全く新しい救いの福音、を少しでもお受けし、お伝えしていくことにお仕えすることが、世界救世教の信徒として最も大切な努めなのではないかと思わせていただきました。

私は、全国の皆さまと共に、明主様が今、“本当の明主様信仰、について極めて重要な養いをくださっているものと固く信じて進ませてもらいたいと思います。

そして、このようにして、明主様のご晩年、『私も驚いたんです』『奇蹟以上の奇蹟』『はじめて人類は救われる』『たいへんな事件なんです』等のお言葉をもって、極めて大切なこととしてお示しくくださった「メシアの御名」の受け止めについて、私は明主様の信徒として、たとえその一端でも受け止めさせていただき、お伝えさせていただけるものへと成長させてもらいたいと、今強く思わせていただいております。

来週2月10日の「教祖祭」において、また、その日の午後からの箱根・奥津城参拝において、私は明主様に、このように気付かせていただいたことを感謝をもってご奉告申し上げたいと思っています。

本年、①之光教団の私共は、「真善美」配布を力とする「会う、聞く、浄霊」において、また、ご浄化の受け止めをはじめ日常生活の事柄全てにおいて、「祈りの言葉」をもって“想念の御用、としての実践に大いに努めさせていただきますよう。

来月は、「救世会館」において、教主様にご出座賜り「春季大祭・豊穰祈願祭」をお迎え致します。

神様は、私共一人一人のうちに、愛と赦しと救いに満ちあふれた大光明輝く天国を、すでに築いてくださっています。

私共の中心に輝く本当の故郷であるその天国に感謝をもって心に向けさせていただく大祭として、また、明主様と共にあるメシアの御名みなにあつて、その天国に全てのものと共に立ち返らせていただけるご参拝として、全国の皆さまとご一緒に大いなる希望をもって臨ませていただきますよう。

“立春”を迎えましたが、まだまだ寒さが続いてまいります。皆さまにはどうかお体大切に、今月度もご一緒にどうぞよろしくお願い致します。

本日も、こうして明主様にお仕えさせていただきましたことに感謝申し上げます、「立春祭」の挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。